

## 佐渡近代の新聞、「新佐渡」複製に関連して

平成 19 年の桜の季節に、東京在住の森八郎氏から「新佐渡」新聞を借用する機会を得た。八郎氏は「新佐渡社」のオーナーであった森守蔵の後裔である。

この大正 4 年の創刊から昭和6年末までの期間、ほとんど欠号のない「新佐渡」は、佐渡近代に地方政治や文芸の面で活躍した人々の消息を訪ねるには最適な資料と思われ、八郎氏からの借用の条件が「電子化による二次資料作成」と云う大仕事だったにもかかわらず、ダンボール4筐、4500 号を越える「新佐渡」を借用し、電子化のために「新佐渡」のページを捲る日々が続いていたが、その作業も借用一年を経て終了した。

また、同年 11 月に相川の森幾氏から、上記期間に続く昭和7年1月から8月、昭和8年4月から5月の同新聞も借用することが出来た。

そこで上記の電子化による二次資料作成の作業の報告を兼ねて、佐渡近代の新聞資料の置かれている環境について述べ、「佐渡近代の宝」とも云える佐渡近代の新聞を、だれにでも閲覧可能な状況で残す糸口となればと寄稿した。

### 佐渡近代の新聞

「相川の歴史・通史・近現代」に、佐渡近代の新聞について詳しい項が設けられ、明治・大正・昭和 10 年代に佐渡で刊行されていた日刊新聞として、「佐渡新聞」「佐渡毎日新聞」「佐渡日報」「新佐渡」「佐渡タイムス」をあげている。

また齋藤長三の「佐渡政党史稿」では上記主要新聞の他、短命に終わった他の新聞についても解説している（以下に記事を添付）。これらの近代に於ける新聞を列記し、発行期間、発行者等を整理してみる。但し、政党史稿および他の資料に於いて、年号等の明らかな誤りについては訂正してある。

|      |                                  |   |
|------|----------------------------------|---|
| 佐渡新聞 | 明治 30 年9月3日創刊<br>昭和 15 年 11 月に廃刊 | 森知幾、本間慶四郎等により創刊、当初は隔日発行、<br>明治 35 年から日刊、<br>昭和 24 年 11 月 30 日に同名の新聞が復刊、刊行期間不明 |
|------|----------------------------------|---|

佐渡政党史稿の記事 ●北溟雑誌の発行[明治二十年十一月二十三日]

金沢村の本莊了寛、茅原鉄蔵、五十里の生田裕及石田の齋藤長三等の協議にて毎月一回北溟雑誌と称する時事雑誌を発行することへし本社を中興に置き茅原を発行人に生田を編輯人に齋藤を印刷人とし左の趣旨書を發表して明治二十年十一月二十三日其第一号を発行した 北溟雑誌を発行する趣旨 省略

右北溟雑誌は始め石田の齋藤活版所で印刷したが其後北溟雑誌社にて活字機械を買入れ明治二十三年五月二十五日の第三十一号より同社にて印刷せるに明治二十六年六月に至り畑野の有志者本間慶四郎に譲り渡した

此時創立者の本莊了寛が有志金を贈られし有志者に對し創業以来五年八ヶ月の決算報告を為すと同時に、北溟雑誌を手放して他人に渡すことは殆ど慈母と赤子の別るゝが如き感慨無量悲壯なる留別辞もあつた、本莊としては左もあるべきことであらう、其後本間等は更に相川の森知幾等とも共同発行して居たが其辺の事は著者にも詳細の事は知るよしもないが兎に角 29 年 3 月まで 312 号まで継続して廃刊となり、之れに代ふるに森が三十年九月佐渡新聞を発行したのである

補足:昭和 24 年 11 月 30 日に同名の新聞が復刊しているが発行期間等は不明である、発行所住所は佐渡郡相川町五郎左衛門町 18 番地、発行人、編集長は安田清次、役員は松岡進、高田平五郎、田中行一、岩部直次、森トメ、顧問として児玉龍太郎、松栄俊三となっている。

|        |                            |                        |
|--------|----------------------------|------------------------|
| 佐渡毎日新聞 | 明治 35 年6月 30 日創刊<br>大正8年廃刊 | 幅野長蔵、青木永太郎、浅香周次郎等により創刊 |
|--------|----------------------------|------------------------|

佐渡政党史稿の記事 ●佐渡毎日新聞社[明治三十五年七月十三日]

佐渡毎日新聞は幅野長蔵に拠り明治三十五年七月十三日第初号を発行された、彼れが何故に此新聞を起こしたか、自己の主義主張を発表せんが為めであるか、若くは自己と其主義を同じくする政党擴張の為めでありしかと云ふに、斯る高尚なる考へではなく、彼れと常に犬猿の間柄なる森知幾が佐渡新聞を利用して時に彼れが不利益なる事柄を掲げ或は人身攻撃にアル事ナイ事を摘発するなど、彼れより言はしむれば、森の横暴極はまりないやり方である、為めに苦しんで居た折柄、進歩党にては佐渡新聞に拮抗せんが為めに新聞計画を為したれ共収支精算の関係上、如何せばやと頭痛鉢巻の由を聞込んだる彼れは、時節到来とばかり大に喜び早速 浅香周次郎、佐々木増右衛門の兩人を以て

創業委員は勿論、維持費、經常費、等総て幅野にて負担して日刊新聞を起こさんと欲すれ共 読者を求むるに苦しむ・・・幸ひに貴党にて相当の読者を與へられなば貴党の機関新聞たらん

と相談を持ち込み来りたれば進歩党も渡りに船と大に喜んで議は忽に成立し進歩党の機関新聞として佐渡毎日新聞と名付け明治三十五年七月十三日其第一号を発刊した、が、サテ愈々発刊するに至って進歩党は我党の機関新聞なりと云ひ、幅野は我が独力にて発行せるものにて何等進歩党の恩誼を蒙り居るにあらず、との衝突を来すこともあり何分円満性を欠くことありて双方共嫌味を生じたる折柄、藤井千代雄が之を担任して経営に当たりたれ共思はしからずとして見捨てしに今度は大正七年口月憲政会にて引受け田中亮一が社長となり機械一切を引受け新穂に持ち行きたりしが幾何ならずして遂に廃刊するに至った

|      |                               |  |
|------|-------------------------------|--|
| 佐渡日報 | 大正3年8月28日創刊<br>昭和15年11月30日に廃刊 | 浅香寛、児玉竜太郎、平岡栄太郎等により創刊<br>一覧表では7月25日創刊（相川の歴史） |
|------|-------------------------------|--|

「佐渡政党史稿」の著者長三は「取材中に日報を読む機会を得ず」・・と記事としても解説していない。

|     |                                    |   |
|-----|------------------------------------|---|
| 新佐渡 | 大正4年9月5日評論雑誌として創刊、昭和12年5月廃刊（相川の歴史） | 森守蔵、塚原徹等が創刊、当初月2回の旬刊、<br>大正5年11月から日刊、昭和9年に高屋次郎に譲渡、<br>昭和12年4月に後藤徳衛に譲渡、（後藤奥衛、温故知新）<br>昭和13年6月廃刊（佐和田町史） |
|-----|------------------------------------|---|

佐渡政党史稿の記事 ●新佐渡[大正四年九月二十五日]

大正四年九月五日 月刊雑誌の形式より森守蔵によって河原田町に呱呱の声を挙げたのであるが爾来号を重ねること二十回当に其一周年に該当せる五年九月五日の第二十一号に於いて

更に本号(二十一号)より従来の月刊雑誌に更に日刊の形式にて江湖に見ゆる

に至れる旨を表白した、則ち大正五年九月五日の第二十一号より日刊新聞として現はれ昭和六年十二月(\*)迄継続せるも森は他の事業の関係上一時休刊し居たりしが九年一月頃 高屋次郎に譲りて経営せしめし意見の相違より之を取り戻し 更に後藤徳衛に托し新穂にて発行したりしも後約一年にして廃刊となった

補足：(\*)長三は昭和6年に休刊としているが、森幾家の昭和7/8年の新聞では記事、号番号とも継続し、発行人も守蔵の縁者「古城順平」となっており、少なくとも昭和8年5月まで休刊の様子はない。

|        |                               |                                    |
|--------|-------------------------------|------------------------------------|
| 佐渡タイムス | 大正14年11月21日創刊<br>昭和13年5月31日廃刊 | 金沢村の中川十右衛門が両津町で発行した日刊新聞<br>(相川の歴史) |
|--------|-------------------------------|------------------------------------|

佐渡政党史稿の記事 ●佐渡タイムス[大正十四年十一月二十一日]

大正十四年十一月二十一日中川十右衛門は両津町に於て「佐渡タイムス」なる日刊新聞を発行したが経営八年の後 昭和十三年五月三十一日廃刊したことは其条に記してある

|      |   |  |
|------|---|--|
| 佐渡新報 | 大正 14 年 11 月 10 日創刊<br>大正 15 年 2 月 29 日廃刊 | 佐渡新聞社員 富崎五作、川島興作、石塚喜一の三人は同社を退社して佐渡新報第一号を発刊した |
| 佐渡新報 | 昭和8年より昭和 15 年迄                            | 佐渡第二代の支庁長高屋次郎が創刊                             |

佐渡政党史稿の記事 ●佐渡新報の発刊[大正十四年十一月十日]

佐渡新聞社員 富崎五作、川島興作、石塚喜一の三人は同社を退社して十四年十一月十日佐渡新報第一号を発刊した。  
 是より前 佐渡新聞社長 森知幾は大正三年五月死去したる後経営上の都合にて大正十七年五月迄 山本悌二郎へ其経営を委託することとなりて山本は之を青木永太郎及本間一松等に経営せしめた、然るに社員の富崎等は青木等の其経営に対する行為に横暴の癖ありとて、絶えず紛糾をつづけて居たが青木等は十四年十月二十五日の佐渡新聞に「本紙改革の爲め本日より向ふ一週間休刊」云々の社告を発表するや富崎等「此改革といふことは発展を意味するものではなく同紙の亡滅を謀るの改革である」となして同社を退社して十一月十日佐渡新報と名付け第一号を発刊した 而して富崎等は盛んに佐渡政友會一部幹部を悪徳呼ばはりをして論難攻撃し延びては山本悌二郎をも同罪なりと筆鋒を向けて責任を問ふなど中々大騒ぎをした、之を見兼ねたる某が中間に入りて斡旋交渉の結果契約を解除して新聞は山本より森家へ返戻することにして十五年一月一日から森一郎が経営することとなりたれば富崎等も佐渡新報は十五年二月二十九日の第四十三号限りにて廃刊することとなった

後 高屋次郎が昭和八年より十五年迄佐渡新報を発行したれ共 之れは富崎等の佐渡新報とは何等関係なく所謂同名異紙である

補足:佐渡新報には昭和 21 年 9 月 2 日宮の渡辺斗司夫、新町の松井誠等により創刊された同名の新聞があり、金井中央図書館に収蔵されている。

|        |                             |  |
|--------|-----------------------------|--|
| 佐渡日曜新聞 | 昭和5年6月 30 日創刊<br>昭和 15 年に廃刊 | 小木の山本幸作、加藤一雄等が発刊、昭和9年9月1日9より<br>佐渡中央新聞と改題、昭和 15 年に廃刊 |
|--------|-----------------------------|--|

佐渡政党史稿の記事 ●佐渡日曜新聞[昭和五年六月三十日]

小木の山本幸作、加藤一雄等は佐渡に数種の新聞ありと雖も何れも日曜日には発行せざるを以て之を補ふの意味にて毎日曜日に発行する一種の新聞を起こさんと計画し五年六月三十日河原田町に於て佐渡日曜新聞を発行した  
 然るに其後 佐渡タイムス、新佐渡の両新聞は廃刊し残る佐渡新聞は政友会、佐渡日報は民政党の機関新聞なるを遺憾とし國の中央に在るを幸いに日曜新聞を佐渡中央新聞と改め偏せず党せず不羈独立の日刊新聞と為したるは昭和九年九月一日にて爾後経営すること六年昭和十五年に至り新体制に基づき

創立後満十カ年を経た弊社も新体制に順應すべく縣の内訓により潔く廃刊するに至りました

と述べて此世を去った

### 閲覧環境

これら明治晩年から大正期、昭和初期に渡り佐渡島内で発行された新聞は、現在どの程度閲覧可能だろうか？  
 最寄りの公共収蔵箇所、国会図書館、新潟県立文書館、金井中央図書館、相川郷土博物館では以下の新聞を収蔵している。但し、マイクロフィルム保有が多いので原典の経路についても以下の表に書き加えた。

### 収蔵箇所と原典の関係

|       |  |
|-------|--|
| 国会図書館 | 佐渡新聞 明治 32 年 9 月 1 日(306 号)～大正 7 年 5 月 31 日(5437 号)<br>佐渡毎日新聞、明治 36 年 7 月 20 日 2 号(2 号)～大正 3 年 11 月 11 日(3666 号)<br>原典関係は不明、閲覧は二次資料がマイクロ、両新聞ともほぼ揃いとされているが未調査 |
|-------|--|

|         |   |
|---------|---|
| 新潟県立文書館 | 佐渡新聞 明治 30 年～大正 7 年<br>原典は佐渡荏川文庫 明治 30 年 9 月～明治 31 年 12 月<br>森幾家 明治 32 年 1 月～明治 35 年 12 月 + 明治 37 年 1 月～12 月<br>国立国会図書館 明治 36 年 1 月～12 月 + 明治 39 年 1 月～41 年 4 月<br>日本マイクロ写真株式会社から購入 明治 41 年 5 月～大正 7 年 5 月<br>佐渡毎日新聞、明治 43 年～大正 5 年<br>東京大学明治文庫 明治 43 年 11 月<br>佐和田町公民館大正 4 年 11 月～同 5 年 2 月<br>佐渡日報、大正 4 年～昭和 13 年 原典は相川郷土博物館<br>佐渡民友、明治 45 年、月 2 回 原典不明<br>新佐渡、大正 4 年～大正 12 年 原典不明 欠号が多い 閲覧は二次資料かマイクロ |
| 金井中央図書館 | 佐渡新聞、明治 30 年～大正 3 年 12 月 新潟県立からのコピー<br>佐渡新報(*)、昭和 34 年～平成 11 年 2 月 原典<br>佐渡時事新聞、昭和 49 年 6 月 8 日～昭和 63 年 5 月 23 日まで 原典<br>新佐渡、大正 12 年を中心にわずか<br>佐渡毎日新聞、大正 4/5 年の一部 佐和田町公民館収蔵からのコピー   |
| 相川郷土博物館 | 佐渡日報、大正 4 年～昭和 13 年 相川浅香家からの原典を保存、<br>全体が欠けている月が多い、閲覧は二次資料  |

#### 複製刊行物

|         |   |
|---------|---|
| 佐渡叢書刊行会 | 佐渡新聞、明治 30 年 9 月 11 日(2 号)～明治 31 年 12 月 28 日(190 号)<br>縮刷版を頒布 原典は佐渡荏川文庫 |
|---------|---|

#### 今回複製した新聞資料

|     |  |
|-----|--|
| 新佐渡 | 大正 4 年 9 月 5 日(1 号)～昭和 6 年 12 月 29 日(4563 号) 原典は森八郎家<br>昭和 7 年 1 月(4564 号)～昭和 8 年 5 月(4979 号)まで 原典は森幾家<br>昭和 8 年 6 月から昭和 12 年 5 月、5686 号(廃刊号)迄はなし、 |
|-----|--|

#### 戦後の新聞収蔵

|         |  |
|---------|--|
| 金井中央図書館 | 佐渡新報 昭和 34 年～平成 11 年 2 月 28 日まで<br>佐渡時事新聞 昭和 49 年 6 月 8 日～昭和 63 年 5 月 23 日まで |
| 両津郷土博物館 | 佐渡民報 昭和 21 年 1 月 25 日～昭和 34 年 12 月 19 日まで                                    |

#### 日刊新聞「新佐渡」の創刊と廃刊の経緯

私は「新佐渡」刊行のすべてを物語るための知識を持たないし、それはそのまま「佐渡近代新聞史」となってしまう。ここでは創刊と廃刊の概略を説明する。

「新佐渡」の刊行経緯については佐和田町史が大変詳しく、「新佐渡社と周辺の人々」と云う項を立てて、佐和田町で育った唯一の日刊新聞について解説している。

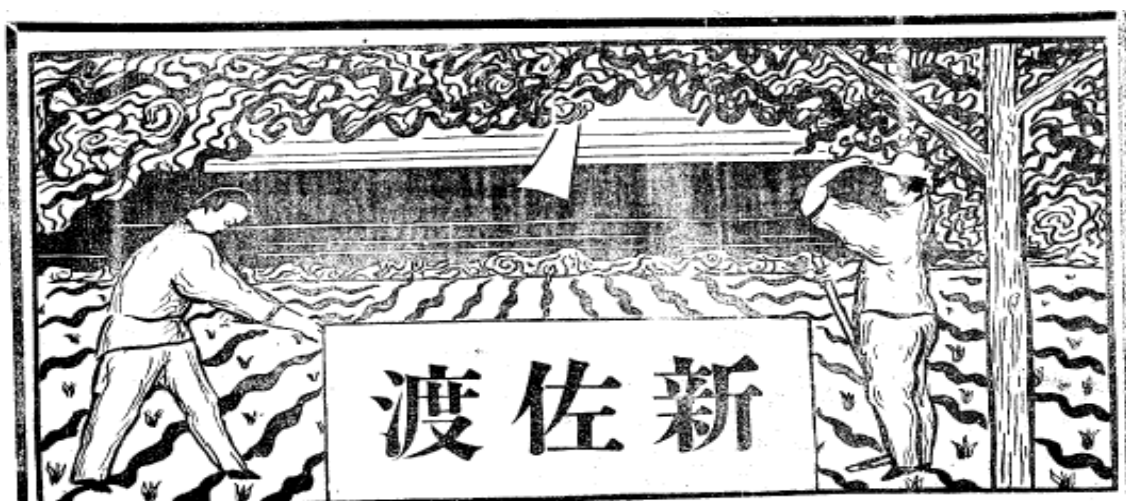
この項は齋藤長三の義孫、齋藤良治郎が「齋藤活版印刷所の創設」の項と共に執筆している。この記事は元新佐渡社社員・下山市造への取材を元に書かれ、もっとも具体的に新佐渡の経緯を述べている。後藤奥衛も文集「温故知新」で「新佐渡社の思い出」として当時のことを書き残している。

「佐渡新聞」は森知幾生前より、郡会議員などの政治活動に忙しい知幾を、知幾の娘婿守蔵が補佐していた。

しかし、大正3年に森知幾が死去したあと、知幾の娘婿の森守蔵と同新聞に就職していた小木の塚原徹等が佐渡新聞の改革を主張し、これが他の運営陣に受入れられなかったことを契機に退社、大正4年9月に旬刊の評論雑誌「新佐渡」を創刊したことから始まっている。

評論雑誌「新佐渡」は塚原徹がその知的志向のすべてを注いだもので、塚原の生涯に渡る友人であった青野季吉や猪俣津南雄などの執筆によって、各号は読み応えのあるものとなっていった。

評論雑誌としての一年間と以降の日刊紙としての紙面を特徴づけたのは、酒井億尋の画である。億尋のシュールな風景画は、庶民的な紙面構成の「佐渡日報」などの既存新聞に飽き足らなかった佐渡の知識人達に受け入れられた。



創刊号を飾った酒井億尋の題画

創刊一年を経て、本社を相川から河原田に移転、21号から日刊紙としての発行を開始した。この当時、社長森守蔵、主幹塚原徹、中川喜一郎、本郷武雄、小林了俊が参加していた。後に後藤奥衛と共に羽茂の人、加藤貞次郎が加わり、長らく発行人として紙面に名を残している。

しかし、評論雑誌と異なり、日刊紙の紙面構成に自己の表現を果たせないジレンマからか、守蔵の商業的な志向とのギャップからか、小木の実家の商売が彼を必要としたのか、塚原は小木へ帰り、客員として新佐渡を補助する立場となる。

「新佐渡」は他紙を越える発行部数を維持していたが、森守蔵は東京夕刊新聞との併売を企画し、これが新聞社の経営が傾く原因となった(後藤奥衛著・温故知新)。

大正14年12月24日の紙面に「本紙十周年を記念し、これまでの地方新聞の慣例に従った活字サイズから、中央紙の如く7.5ポイントとする」と、次号からの活字入れ替えの広告が掲載されている。創刊以来使用してきた活字の疲弊は私の電子化作業に於いても感じられ、用紙の品質低下と相まって高まる読者の不満に答えたものであろう。

しかし、ページサイズの大きい佐渡新聞等の記事量に対抗するため、新たな活字サイズとして選択した7.5ポイントはあまりに小さく、読者の目にはなじまなかったと容易に推測される。

活字入れ替え後、小型活字の扱いに不慣れのためか二頁の号が続き、大正 15 年1月末に至り、ルビ付き活字との入れ替えと東京から職人を招聘などを社告、活字の再入れ替えの後はさすがに紙面品質が上がり、読みやすくなっている。小型活字への入れ替えは、「佐渡新聞」などの地方紙が採用していた活字サイズから中央紙が採用を始めていた活字サイズへの転換によって他紙との差別化を図る方策として考えられたことと思われるが、二度に渡る活字入れ替えの費用も、「新佐渡」の零落を早めたかもしれない。

更に、10年あまりの紙面を通して読んで感じられることは、大正 10 年近くなると、創刊から六～七年の紙面にあふれていた、都会帰りのボヘミアン達の思いこみの激しい論説や、詩や、島政への意見が影を潜めたことである。

初期紙面のどこかで、珍しく寄稿した中山小四郎が「あまりに同人誌的」と好意的に批判しているが、編集者が歳を経て普通の地方新聞を目指し、同人の意見交換誌的な面が損なわれた時、読者の同紙への興味も失われたと思われる。

大正 13 年頃には、本間林三が「新たな農民詩人いでよ」と題した論説の中で、後藤奥衛を風流貧乏と批判し、金子不泣の詩人としての危なげのない完成ぶりに反対し、新たな歌読みの出現を期待しているが、相変わらず刊行は平穩に破綻なく続いている。

これを時代背景がした事とかたづけければ簡単だが、いわば公許の政党機関誌としての他紙を読まずに「新佐渡」を購読した人々の知識欲求にも答えられず、政党と結びつく他紙ほどの情報量も提供できず、自ら閉塞の道を選んだ「新佐渡」の日々については更に調べてみたい。

昭和9年に至って休刊となった「新佐渡」を、佐渡支庁を退職した高屋次郎が買い取り、相川で森二郎の協力で再興しようとしたが果たせず衰微するばかりだった。

その後、宝生鉦業の鉦山師として笹川鉦山に従事して資金を得た守蔵は高屋次郎から経営権を買い戻し、後藤奥衛に譲渡した。

奥衛は守蔵から70円で「新佐渡」の権利譲渡を受け、昭和 12 年4月に、新穂の活版屋池野盛蔵、河原田の印刷工下山市造(元新佐渡印刷工)と組んで、新穂の池野活版を拠点にして旬刊で発行していたが、5686 号で廃刊してしまった(温故知新)。

私の手許に「新佐渡」昭和 12 年 5 月 20 日、5685 号がある。この新聞は毎月三回五、十五、二十五日発行、編集兼印刷人、発行人は松榮猶吉、発行所は奥衛の住所、新穂村大字湯上 185-2 新佐渡社 となっている。

この新聞の4面には戦後、雑誌「近代」に再録された、金子博が堀部春晃に宛てた手紙、「故郷よ遠し」の前半が、後藤奥衛の序により書簡文学作品として紹介されており、この翌号に廃刊となる気配は感じられない。

また、新穂で見つけた新聞切り抜き帳には、昭和 12 年 6 月 25 日、5686 号の六面の一部が貼り付けられている。通常、四面で形成されている「新佐渡」が正月でもないのに六面となっているのは、この号が廃刊直前の号であった可能性もある。「温故知新」の記述が正しいとすると奥衛が出した最後の「新佐渡」は昭和 12 年 6 月 25 日と云うことになり、奥衛版「新佐渡」はわずか三ヶ月で終息したことになる。

「相川の歴史・通史・近現代」によると、「新佐渡」は大正 12 年5月の廃刊となっている、昭和 12 年の誤りであろうが、「温故知新」の記述に近い。

一方、佐和田町史での、昭和13年6月に後藤奥衛が「草人社」を起こしたことで、下山市造が離反したことが「新佐渡」廃刊の原因、と下山市造が述べている記述をもとにすれば、後藤奥衛は同じ昭和13年に哈爾濱へ脱出しているから、昭和12年4月に譲り受けた後、一年間は「新佐渡」を続けていたことになる。

廃刊の経緯については各史書、温故知新、現存の新聞からの判断により、なるべく確実な線で書いたが、確認となる昭和

8年半ば以降の新聞が見つからない、発見が待たれる。

### 今回複製の「新佐渡」の原典について

この新聞資料は6ヶ月ごとに厚紙・クロス貼りの表紙による製本がなされている。

創刊当初大正4年9月からの一年分は、評論雑誌でもあり、版も縦 30cm×横 22cm と小型であったがこれをひとつの製本にし、日刊新聞となった大正5年9月から昭和6年 12 月 29 日まで、縦 38cm×横 26cm の版となり、これを半年づつ綴り 31 冊、計 32 冊にしている。

製本は厚さ約4センチの半年分を麻紐で綴じている。但し、製本後に三方を裁ち落として成形しているため、中にはページに食い込んで切断されている号もある。

この現資料は、年代によっては「新佐渡社」の営業部が広告代金の集金用に使用していたらしく、広告に○印がついている。また、一ヶ月づつの最初と最後の号は経年焼けがあるので、この資料の製本が成された、昭和6年 12 月までは、ひとつづつの綴りにより、積み上げられていたと推測され、その時点で使用された綴り穴も見られる。また、この資料は読者配布できない「ヤレ」の紙面を使ったと思われる、印刷の濃淡が激しい。

### 今回複製の方法と電子化の意義

スキャンのために、所有者の許可を得て製本の綴じを分解し、スキャン後は麻紐の代わりに結束用のバンドで綴じ直した。

製本をほぐした理由は、冊子状態ではとてもページ全体を安定した品質でスキャンすることは出来ず、折りの箇所にも記事があり、これまでも記録しなかったからである。製本の分解に理解を頂いた森八郎氏に感謝したい。

まず、A3 サイズをカバーするスキャナ(EPSON ES-8500)をインターネット・オークションで用意し、これを Windows パソコンに接続してスキャンを行い、400DPI/モノクロの PDF データを作成した。

モノクロ/400DPI の解像度でスキャンした時、勿論データ圧縮が行われてファイルに収容されるが、平均2MByte/号(4ページ)となり、700MByte程度の CD に一年分が収録出来る。

今回の電子化のためにデジタル・カメラの使用も考慮できた。デジタル・カメラは被写体を一瞬(数秒)で撮影できる。しかし、カメラは単眼のレンズのため、周辺部の収差などの問題も出る。デジタル・カメラは筆書きの文書収集などには充分と思えるが、閲覧者が新聞の本文記事を苦勞せず読むためにはスキャナによる電子化が必要と思われた。

また電子化には、インターネット上での公開が可能と云う、大きなメリットがある。例えば、国会図書館で電子化されていない「佐渡新聞」を閲覧するためには、マイクロフィルムの貸し出し、マイクロフィルム・リーダーの幻灯の様なおぼろな光の中でリールを進め必要な記事を探す。この場所をメモしておき、コピー窓口に依頼すると 70 円/ページ(2 枚になる)の費用が掛かり、その品質は相当に悪い。

一方、電子化出来れば随時閲覧出来、一次資料とほぼ同じ品質の二次資料をプリンターから出力することが出来る。

また、電子化のメリットとして「文字検索機能」がある。予め新聞ページを画像化したデータ(今回複製したデータ)をプログラム処理すると、個々の文字を検索出来るようになる。

400DPIの解像度は過剰品質であり300DPI程度でも良いか？と考えたが、印刷のバラツキが激しい原稿に対して万全を期して 400DPI を選択した結果、一号 4 ページのスキャンに4分を要する。

機械的にスキャン作業が出来れば良いが、やはりスキャンしながら面白い記事は読んでしまう。この時間は有益な時間ロスではある。以下、読んでしまった記事のなかから「本間一松の村長選挙落選」の記事を紹介してみる。

### 「新佐渡」記事から

この記事は青木の井戸塚政治家、本間一松の性格について論述している。

大正 12 年2月6日と7日の新聞に、「佐渡政界の犬養、村長を止めた本間一松」と題して、新穂村村長選挙で河原作一と村長の椅子を争った本間一松が敗北したことが記事になっている。

記事では一松が佐渡政友派の元老であり、新穂村の村会議員の勢力分布においても政友が多数派を占めており、負けるはずがない、その一松が敗北したのは、彼が村民や村議とかけ離れた、人々の追隨理解を許さない人であったからと解説している。一松は理想家、直情往行、議論家であり、皆には偏狭、抱擁力のなさにみられ、また清廉すぎる性格が、周囲が敬して遠ざける存在になりすぎていたと指摘している。

彼が村長であった時には、村会議員が異論を唱えると「よく考えてみよ」と休憩にしてしまうような強引さを発揮したらしい。この様な一松を村民や村会議員は煙たがり、河原作一を村長に選んだとしている。

明治末期、井戸塚政治家としても、北一輝の後見人としても、妥協のない活動をしていた一松は、明治 38 年頃にはすでに財産のすべてを失い、家財を売り立てするほど零落していた。その一松にとって村長や各種の委員職などは活動維持のための収入元であったはずだが、そんなことは構わず、周囲に妥協しない村長ぶりを続けた結果、落選するはずのない選挙に落ちてしまった。

一度は、社会主義者として一輝等と共に要観察人のリストに加えられた本間一松であるが、彼の性格を表す文章はほかに残っておらず、この様な新聞の論説から想像以上の理想主義者であったと察することができるだけである。

本間一松は私が興味を持つ佐渡地方政治家のひとりなので紹介したが、大正4年～昭和6年の 17 年間、日々の紙面には、佐渡近代史に欠かせない出来事や論説の数々が含まれていると考えられる。

「佐渡政党史稿」著者の齋藤長三も、新佐渡と佐渡新聞の記事から、「史稿」の項目を拾い、自分が大方の事件に参加していたメリットを発揮して、また地元の生存する関係者や、上京したおりの取材により、肉付けをしていった、と覚え書きしている。

一方、近代の新聞は多少背景の相違はあっても、特定政党との結びつきが強く、党派に偏らない客観的な論調が売りであった「新佐渡」にしても、社長の森守蔵の政治的立場は政友会別働隊の色を濃くした時期もあった。紙面を形成する論説をまとめた塚原徹、中川喜一郎、本郷武雄、小林了俊等の同人達が森守蔵と政治信条を異にしていたことは明らかであり、政治的な立場の違いと新聞の成り立ちとの関係については、佐渡日報における浅香寛創刊当初の発行人となっている平岡栄太郎との関係等を含め、明らかにしたいことがらである。